

---

# 手向けの花

金弘 美樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手向けの花

### 【Nコード】

N6947H

### 【作者名】

金弘 美樹

### 【あらすじ】

お盆という事で、高木×佐藤×松田ものを・・・最も出会いたくない場所で、最も出会いたくなかった男と出会ってしまった。過去の想い人と今の想い人。交錯する想いは果たして何処に向かうのか・・・

厳かな空気が漂うそこには少々不釣り合いな赤い捜査車両を降りた佐藤は、愁いを含んだ眼で天を仰いだ。

見上げた空は青。

むせ返るような熱が肌を撫で、じわりと額に汗が滲む。それを手の甲で拭いながら、佐藤は浅い溜め息を吐いた。

決して悪い事をしている訳では無いのに、此処を訪れる度に途方も無い罪悪感に苛まれる。

もう、此処には来ない方が良いのかもしれない。

頭では判っているのに、なかなか決心がつかない。もしかしたらこの割り切れない感情を、人は未練と呼ぶのかもしれない。

佐藤の口元に苦い笑みが浮かんだ。

どんなに季節が巡っても、無垢に咲き誇る真っ白な花を抱えて歩くその道は、以前此処に来た時と変わらぬままだ。まだほんの数回しか訪ねた事が無いにもかかわらず、迷う事なく辿り着いたそこには物言わぬ彼。

「久しぶりね、松田君。」

その名を口にした瞬間、胸の奥が切なく痛んだ。それには敢えて気付かぬ振りをして、佐藤はその霊前に弔いの花を手向け、静かに手を合わせる。己の目の前で儚く散った命に短い祈りを捧げ、物憂げな視線を上げた佐藤はゆらりと力無く立ち上がる。直後、背後に人の気配を感じて、佐藤は僅かに首を捻った。  
ドクンと鼓動が跳ねる。

そこに立っていたのは白い可憐な花を携えた長身の青年。

途端に佐藤の胸は呼吸をする事ですら苦しい程に締め付けられた。

「やっぱり来てたんですね。」

困ったような笑みを浮かべ、彼は穏やかな口調で言う。

「・・・高木くん・・・どうして・・・？」

やっとの事で喉の奥から絞り出した声は明らかに掠れていた。

その問いに答える事なく彼は佐藤の前を擦り抜けまだ新しい墓石の前に純白の花を手向ける。そして、胸ポケットから封の切られていない煙草を取り出し無造作に1本引き抜くと、慣れた手つきで火を点し口に運んだ。

「吸うの？煙草・・・」

余りにも自然な彼の仕草に、佐藤は怪訝な顔で問い掛ける。

「いいえ。」

煙を燻らせながら彼は短く答えた。

「真似してみただけですよ。」

ほろ苦い香りがふわりと広がり、幾重にも細く立ち上る煙が静かに揺れる。それを墓前に供えた彼は瞳を閉じ、静かに手を合わせた。凜として整った美しい横顔。

佐藤は思わず息を飲んだ。

張り詰めた空気が静寂となり二人を包む。

その途端、とてつもない罪悪感が佐藤を襲った。

「ごめん・・・」

呟いた声は吹き抜けた風の向こうに掻き消えた。

「謝らないで下さい。」

俯き手を合わせたまま彼は小さな声で答える。

「謝られると・・・余計に辛くなりますから。」

その声は確かに震えていた。

「・・・」

張り裂けそうな胸の痛みが佐藤の口から言葉を奪う。溢れ出した懺悔の涙がとめどなく頬を伝った。

「すみません。」

ゆっくりと立ち上がった彼はいつもと変わらぬ優しい口調で言う。温かい大きな手がそと佐藤の髪を梳き、頬に零れた雫を拭った。

「謝らないで。あなたは何も悪くないんだから。」

手を伸ばし、頬に触れる優しいその温もりを確かめる。

「ごめんね。」

彼の優しさに甘えて。

傷付けた。

それは悔やんでも悔やみ切れない罪。

彼がどんなに私を愛してくれているかなんて、十分過ぎる程解っていた筈なのに。

「傷付けたのはオレの方ですよ？」

俯いた彼の口から予想もしない言葉が零れた。

「一番辛いのはあなたなんだって解っていたのに……」

もう優しくしてもらう資格なんて無い筈なのに。

どうして彼はこんなにも優しいのだろう。

「お人よしにもほどがあるわよ。」

泣きながら呟く佐藤に、

「こういう性格なんです。」

寂し気な苦笑を浮かべて彼は答えた。

「だったら死ぬまですっと傍に居て。ずっとずっと傍に居て、誰よりも私を愛し続けて。」

零れ落ちる涙を拭いてもせずに佐藤は彼に詰め寄る。

「私もずっと死ぬまで愛し続けるから。あなたの事を。誰よりも。」

みるみる相好を崩し力強く頷く彼に、佐藤もつられて笑みを零す。

彼となら。

きつと乗り越えていける。

どんなに辛い事も。

悲しい事も。

彼と一緒になら。

見ててね、松田君。絶対に彼と幸せになつてみせるから。

彼の腕に飛び込んだ佐藤は心の中でこっそりと呟いた。

（後書き）

先日自身のブログにて掲載した作品です。

私がこれまで書いてきた作品の中で、高木君が松田君と直接対峙したのはこれが初めてなのですが、いかがでしたでしょうか？

個人的には高木君が松田君の墓前に花と煙草を手向けるシーンが非常に好きです。このシーンには高木君の松田君に対する複雑な思い（純粹な尊敬やら、嫉妬やら）の全てを詰め込んだつもりです。

そして、似ているけれど違う過去の想い人と今の想い人の間で揺れ動く佐藤さんの気持ちとどこまでも真摯に向き合う高木君の切ない想いを感じ取っていただけたら……作者としては本望です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6947h/>

---

手向けの花

2010年10月28日07時23分発行